



<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/kanto/>

## 目 次

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| 9年間の附属図書館長を退任して ……………                | 1  |
| 平成20年度附属図書館実績報告及び<br>平成21年度計画について …… | 3  |
| 『ラーニング・commons』フォーラム開催報告 …           | 5  |
| ラーニング・commonsがオープンしました …             | 7  |
| 平成20年度特別図書一覧 ……………                   | 9  |
| 本学教員著作物の寄贈リスト ……………                  | 10 |
| 名高商旧蔵書と東大保転本の<br>選及入力完了について ……       | 10 |
| 利用者から見た図書館 ……………                     | 11 |

## 9年間の附属図書館長を退任して

伊 藤 義 人

### 1. はじめに

2000年4月に、附属図書館長に就任し、これまで9年間、利用者中心の附属図書館になるように、商議員と図書職員の方々の協力の下で改革を続けてきました。その間に、2004年4月に国立大学の法人化が実施され、国立大学附属図書館のあり方は大きく再設計を求められてきました。

私は、商議員会で、年度始めに懸案事項を明らかにするとともに、図書館職員全員にもその懸案事項を直接示して、私自身も含め図書館が緊張感を保つように努めてきました。「図書館がよくなれば大学がよくなる」の信念のもとにサービス水準の向上と附属図書館の高度化の活動をしてきました。

そのため、附属図書館の責任者として館長室に詰め、経営の基本と言われている「人、もの、金」を把握し、昼間はできるかぎり図書館職員となることを目指しました。出来ることは全て、また、必要であればできそうも無いことにも取り組みました。実現できたことも多かったです。改革の結果は、今後の歴史的評価を待つよりありませんが、ここでは、いくつかの事例についてその経緯の一端を書いてみます。

### 2. サービス水準の向上と図書館の高度化

#### 1) 開館時間の延長

利用者サービスの原点として、開館日数と開館時間の延長は、大学図書館にとっては必須の

事項です。授業が始まっているのに、図書館が開いていない状況などは、利用者とりわけ学生を大事にする大学として問題でした。

館長になってすぐに、開館時間を長くすることを試みましたが、最初は種々の問題があり授業開始時間の8時45分に開館するのがせいっぱいでした。その後、環境学研究科設置の現地調査を契機にして、夜の閉館時間を20時から22時まで延長しました。閉館日を少なくする取り組みを継続的に行い、1ヶ月に1日の書架整理日休館を最後に無くして、2008年4月から年末年始しか休まない中央図書館が実現しました。

開館時間延長の最後になったのが、最初に取り組んだ早朝開館であり、「館長と話そう！」の会で、学生から調べものをしてから授業を受けたいという要望も受けて、2009年4月1日から、大学本部からの財政支援を得て、8時開館が実現しました。すなわち、私が退任した次の日からでした。

#### 2) 電子ジャーナルの確保

学術情報の中で、学術雑誌は重要な役割を果たしています。館長になった当時は、紙ベースの雑誌の高騰によって、毎年購読数を減らすのが図書館の役割のような状況でした。また、電子ジャーナルが始まる時期でもあり、さらなる財政負担が必要になっていました。この問題は、1つの大学では対応できないと考え、館長になってすぐに、国立大学図書館協議会（現

在は協会)の下に、電子ジャーナル・タスクフォースを作り、最初の5年間は私が主査をしました。これは、全国の国立大学を代表して、外国出版社などと交渉をして、世界的に有利な契約をするとともに、電子ジャーナル普及とその有効利用をはかり、電子ジャーナルの特性を活かして大学間の情報格差を少なくすることが目的の組織でした。

結果として、外国大手出版社の約15,000タイトルの電子ジャーナルを、包括契約の対象とすることができ、名古屋大学は全国の電子ジャーナルのコンソーシアムに大きく貢献することができました。

電子ジャーナルの普及期において、各国立大学は従前の3～4倍の学術雑誌にアクセス可能になり、国立大学と出版社はWin-Win関係を築いたと言われるようになりました。

包括契約が始まった当時の学術雑誌の価格高騰は毎年10%前後であり、電子ジャーナルの購読にあたっては5%を標準とするプライスカップを設けて対処しました。呼び水としての文部科学省からの電子ジャーナル購読経費の補助もあり、各大学は学内予算確保にも努力しました。

しかし、国立大学の法人化が2004年4月に実施され、毎年削減される運営交付金の状況のなかで、雑誌購入経費のみが、毎年5%以上上昇する状況は放置できなくなりました。また、電子ジャーナルの普及期は終わり、各研究者がどのように電子ジャーナルを使うかの経験を蓄積した結果、各出版の提供する全ての電子ジャーナルを一括して購読するBigDealモデルの種々の矛盾も露呈してきました。すなわち、各大学において学術的に全くあるいはほとんど使わない雑誌に関して、それらが淘汰されずに維持するための代金を支払っているようなことになっていることが分かってきました。

必要なものを可能な経費の中で、かつ、BigDealから撤退するときわめて不利となる現状の契約モデルを改めた新時代の契約モデルが必要であるとの認識に至りました。

そこで、2008年度において、新契約モデルの構築を目指して、学術情報流通改革検討WGと合同電子ジャーナル・タスクフォースを国立大学図書館協会の下に作り、再度私が主査となり、協会会長と協力してシンポジウムなどを開催し、この問題が大学図書館だけの問題でなく、日本の学術において重要な問題であることを国立大学協会、学術会議、文部科学省およびマスコミなどにも訴えました。また、新契約モデル

の構築に関して、大手出版社との交渉も開始しました。数年後に新たな契約モデルが必要であることを合意できた出版社もありますが、当面決裂した出版社もありました。具体的な新契約モデルの構築は、まだこれからの交渉にかかっています。学内での経費確保と同時に、全国レベルでの粘り強い活動が今後とも必要です。

### 3) 機関リポジトリの整備

図書館が学術情報を収集またはリンクして提供することは広く知られていますが、大学の知的生産物を外部へ発信するのも、大学の説明責任を果たすために図書館の大事な役割です。従来もホームページなどで貴重資料の公開は行っていましたが、ここ数年で学術機関リポジトリを立ち上げ、大学全体の情報発信の仕組みづくりが完了したのは大変意味があると思います。学内構成員の理解を得て、今後の継続的な論文などの資料と経費の確保が課題です。2009年度までは、国立情報学研究所との共同プロジェクトで予算措置がありますが、それ以後は、学内措置と文部科学省の支援が不可欠です。

### 4) 市民開放と友の会

名古屋大学附属図書館は、構成員だけの図書館ではなく、図書館の学術情報を必要とする市民にも開放された図書館です。最近、年間4万人を越える中央図書館の学外利用者がおり、本の貸し出しも行うようにしました。附属図書館の友の会も、最近、会員数が約250名となり、これまで15回の独自の講演会も実施しています。今後は事務的なことも含めてもっと自律的な運営が課題となっています。

### 3. 研究開発室

大学図書館において、図書館の高度化や高度利用のための研究開発機能は不可欠です。館長になってすぐに、大学本部と評議会の協力を得て、専任室員2名と兼任室員数名(現在9名)の研究開発室を立ち上げ、その成果を展示会、講演会および国際会議などを主催して発表できたことは大きな喜びでした。名古屋大学附属図書館の大きな特徴となっており、他の国立大学で専任教授を置くようになった例もあります。今後、専任室員の継続確保が最重要課題の1つです。

### 4. 館(やかた)としての快適空間の構築

学内で最も快適な空間を図書館は持つべきであるとの方針を最初から掲げました。中央図書



## I. 平成 20 年度事業実績報告

### 1. 学習教育支援

#### 1) 学習用図書の整備

平成 20 年度も、昨年に引き続き全学教育科目用シラバスに加え、学部・大学院の授業用シラバスに掲載されている教科書、参考図書の整備を行った。また、中央図書館備え付け図書の充実のため、教員及び基礎セミナー TA に推薦依頼を行った結果、187 冊（内、英文図書 67 冊）の推薦があった。一方、学生の就職活動を情報の面から支援するために、就職関連資料の整備として 126 冊の図書を選定した。

蔵書整備アドバイザー制度による学習用図書の点検は、担当者である教員の作業負担が軽減されるよう、点検方法の見直しなどを行い、作業方法を選択できるようにした。

#### 2) 教育支援サービス・情報リテラシー教育

##### ①図書館ガイダンス等の開催

平成 20 年度は、中央図書館で講習会 35 回、留学生ガイダンス等 9 回、基礎セミナーの TA 向け講習会 8 回を実施、また各学部でも講習会を実施した。

##### ②パスファインダー作成支援システムの研究開発

平成 20 年度はパスファインダー協同作成支援システムを開発し、試験運用ができる体制を整えた。

##### ③ラーニング・コモンズの構築等

平成 20～21 年度の 2 年計画の一年次として、中央図書館 2 階南側を改修し、グループラーニングエリア、セミナールーム等の整備を行うと共に、「館長と話そう！」の中で学生から希望のあった項目への対応を図るため、コピー機の増設、館内無線 LAN の利用準備を行った。

また、昨年度要望のあった研究個室の学部学生への開放の試行を行った（H20.8～）。

### 2. 研究支援・学術情報基盤整備

#### 1) 学術デジタルコンテンツの整備

##### ①電子ジャーナルの整備

学術情報基盤としての電子ジャーナルの整備については、毎年の値上がりに対応するため、苦労を重ねているが、平成 20 年度は、国立大学図書館協会における合同電子ジャーナルタスクフォースの運営に携わり、新しい購読モデルを求めて大手出版社との協議を進めた。

一方、従来予備費（間接経費）で措置されていた購読規模維持補填経費と電子ジャーナル・バックファイル導入経費が、平成 20 年度からは本予算に事項替えされた上、電子ジャーナル

購読経費として事項統合された。これらの経費については、値上がり相当分の増額も認められた。

また、昨年度に続き、Wiley-Blackwell のバックファイル（80 タイトル）を整備した。

##### ②資料の電子化・データベース化

昨年度に引き続き科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受け、エココレクション（環境共生）データベースの整備を進めた。

#### 2) 最先端学術情報基盤（CSI）事業への参加と NAGOYA Repository の取り組み

##### ① NAGOYA Repository

国立情報学研究所の CSI 事業に参加し、「学術機関リポジトリのためのシステム連携用ツール」、「学術機関リポジトリをプラットフォームとする電子出版システム」の 2 つの技術開発を推進した。また委託経費により学位論文や科研費報告書の NAGOYA Repository への遡及登録を進めた。

##### ②東海北陸地区 CSI 事業報告会

本学では平成 20 年度も、国立情報学研究所、附属図書館及び本学情報連携基盤センターの共催で、標記報告会を 3 回開催した。附属図書館では、「学術機関リポジトリの最前線」と題した報告会を開催し、全国から 52 名の参加者があった。

### 3. 社会貢献・社会連携

#### 1) 資料展示会・講演会

恒例の春秋 2 回の企画展示会及び講演会を行ったことに加え、平成 20 年度は、源氏物語千年紀に合わせた記念事業として「源氏物語の書物と絵画」の展示会及び講演会、ノーベル賞受賞記念パネル展示を開催し、千人以上の来場者があった。

#### 2) 東海地区図書館協議会等の活動

国立大学図書館協会の地区支援事業の活動として開催した「ラーニング・コモンズ・フォーラム」には、全国の国立大学だけではなく、東海地区の公私立大学の図書館、公共図書館から 72 名の図書館員が参加、活発な討議や意見交換、交流が行われた。

### 4. 業務運営の改善・施設設備の整備

#### 1) 機関別認証評価

大学評価・学位授与機構による大学機関別認証評価結果において、蔵書整備アドバイザー制度の導入により、図書の整備充実と提供を図っていることが、優れた点として評価された。



## 講演

井上 創造 (九州大学附属図書館研究開発室准教授) 「米国における Learning Commons 事情について」

## ワークショップ

○ラーニング・コモンズ施設の事例紹介・活用について (事例報告)

橋本 春美 (東京女子大学教育研究支援部図書館課長) 「マイライフ・マイライブラリー」

波多江 貴子 (名古屋工業大学附属図書館学術情報課情報サービス係長) 「学習空間の改善と学内連携」

山内 隆文 (名古屋学院大学学術情報センター課長補佐) 「集いの場としてのラーニング・コモンズ」

井上 修 (名古屋大学附属図書館情報管理課長) 「名古屋大学附属図書館ラーニング・コモンズ」

## パネルディスカッション

助 言 : 三根 慎二 (名古屋大学附属図書館研究開発室助教)

冒頭に、九州大学附属図書館研究開発室の井上創造准教授から、ラーニング・コモンズの定義や歴史、何故今なのか、や、20年後の図書館像について、電子ジャーナル、機関リポジトリ、自動書庫、電子ペーパー、RFID 図書館、IC カードなどの観点から、現在の図書館事情と Google、Web2.0、SNS などの主にバーチャルな世界に存在する「ライバル」との関連を中心に、われわれ図書館側の自己成長又は自己改革機能の必要性が強調された。その上で、早くから Library Commons を設置した米国マサチューセッツ大学アマースト校の事例について報告があった。

特徴として、1) カフェ施設 (午前1時までオープン; 倒れてもこぼれにくい library coffee cup)、2) 勉強が完結できる場所、3) PC260 台完備と利用状況一覧システムの導入 (情報処理センター管理分 200 台 (大学ライセンスのソフトウェア有)、図書館管理分 60 台)、4) 様々な形態の机やブース (パーティションで仕切られた机、ガラスで仕切られたミーティングスペースなど)、5) テクニカル・サポート (常勤スタッフと学生スタッフ、それぞれ3交代制)、6) コピー機、プリンター、自動販売機の自動管理システム (Pharos)、7) ブースでの携帯電話使用可と携帯電話ボックスの完備、8) 各種人的サポート (学生支援のための各種センター分室設置; 就職指導センターや執筆指導セン

ターなど)、9) 図書館職員による情報リテラシー講義、10) レファレンスサービス、11) 授業時間と重複しない各種窓口のオープン時間、などの要素が挙げられた。この他、韓国における導入事例や九州大学における取り組みについて報告があった。

続いて、大学図書館の事例報告として、東京女子大学から「マイライフ・マイライブラリー: 学生の社会的成長を支援する滞在型図書館を目指して」と題した報告があった。まず全体を「学生1人ひとりが、図書館を「マイライブラリー」として自分流に利用しながら滞在中、「マイライフ」の構築を目指し、社会的成長をはかることができるように支援するプログラム」への取り組みとして位置付けた。ハード面が「マイライブラリー」であり、多様な学生ニーズに対応した空間をもつ滞在型図書館と定義、設備としては、1) メディアスペース (シンクライアント PC50 台) (eBook や eJournal による情報検索・収集から論文作成まで可能)、2) コミュニケーション・オープンスペース (自由に意見を交換し、グループ学習できる場)、3) プレゼンテーションルーム (学内イベントの実施、ガラス張りの部屋)、4) リフレッシュルーム (学習の合間に気分転換できる空間、飲食可能)、5) グループ閲覧室と個人ブース (遮音性の高い高密度なグループ学習のできる部屋、ひとりで集中できるスペース)、から構成される。

一方、ソフト面が「マイライフ」であり、多様な学生ニーズに対応した「学生協働サポート体制」を中心とする支援、具体的には、1) ボランティア・スタッフ、2) サポーター、3) システムサポーター、4) 学習コンシェルジュ (大学院学生)、による多彩な支援体制が構築されていた。

名古屋工業大学では、耐震改修に伴う学習空





です。なお、プロジェクターが設置されている閲覧席が空席であれば、当日でも利用の申し込みができます。

プロジェクターを利用できる時間は、開館時刻から閉館時刻の30分前までで、1回につき90分、連続して2回まで利用できます。

ラーニング・コモンズでは、グループでの議論や共同作業ができますが、大声で話さないなど周囲への配慮もお願いします。また、このエリア（2階南側フロア）以外はこれまで同様、静粛空間を維持していますのでご協力ください。

## (2) セミナールーム B

参考調査カウンターの前、グループラーニングエリアに隣接してセミナールームを設けています。教職員や学生同士での共同の学習又は研究をしようとする場合に利用できます。

利用できる時間は、開館時刻から閉館時刻の30分前までで、1回につき90分、連続して2回まで利用できます。利用の予約は、利用する日の4週間前から3日前までです。

座席は12席で、各席にパソコンを設置しています。他に講師用の机・パソコンも用意しています。

従来サテライトラボで行っていた図書館の各種ガイダンス・講習会をここで行えるようにしています。（これによりガイダンス・講習会の実施にともなうサテライトラボの利用制限が減少します。）

セミナールームが、講習会・ガイダンス、セミナーなどで占有的に利用されていないときは、附属図書館の第3サテラボとして、個人でのパソコン利用ができます。

語学学習の自習もできるように、CALLシステムにも対応しており、ヘッドセットを用意しています。



## (3) 参考図書エリア

参考図書は精選し、西側のエリアに配置しています。利用頻度が極めて低いものやデジタル資料で代替可能なものなどは、1階の参考図書の書架あるいは情報基盤センターの地下保存書庫に移動しました。保存書庫の参考図書の利用は、参考調査カウンターでお尋ねください。

白書は、南側の窓に設置した低書架に移動しました。

百科事典は、西側の窓の付近に新たに設置した低書架に排架しています。

## 3. 平成21年度の計画

平成21年度のラーニング・コモンズ構築計画は、中央図書館2階の北側に、多目的ラーニングエリア、AVエリア、ライティングセンター、セミナールームA、雑誌エリア、総合サポートデスクなどの整備を予定しています。

多目的ラーニングエリアは、ゆったりした机で、資料を広げつつパソコンを併用した学習等の行えるエリアです。

ライティングセンターは、論文・レポートの作成を支援するエリアで、高機能のパソコンと広い作業机を配置し、スキャナー等の機器や論文作成に役立つ各種ソフトウェアを用意し、論文・レポート作成に役立つ資料も揃える予定です。

セミナールームAは、平成20年度に整備したセミナールームBより広い部屋で、4階のサテライトラボと同様のパソコンを用意し、セミナーや講習会の会場として利用できます。セミナー等で利用しない時間は、個人利用に開放します。

総合サポートカウンターは、多目的ラーニングエリアやライティングセンターの中間に位置し、情報機器に対するITサポート、レポート作成から英文学術論文作成までのライティングサポート、履修登録サポートなど、スケジュールを定めて各種サポートの要員を配置する予定です。

## 4. おわりに

ラーニング・コモンズは、これまでの静謐な図書館のイメージを変えるものですが、2階フロア以外は従来通りの静謐な空間を維持します。

なお、今年度は構築計画の2年次として、主に2階北側を整備しますが、図書館を閉館せずに資料や書架の移動、各種工事を行う予定です。そのため、該当箇所への立ち入りや資料の利用







図書館の利用法をご紹介したい。シヤンタルと比べて明らかに情熱などなにかが欠けていると思うため、くれぐれもまねしないでください。

その前に、まず、中央図書館について簡単に紹介をする。

日本の国立大学の特徴だと思うが、大学に附属している総合図書館（名大の場合は中央図書館）のほかに、各部局にそれぞれの図書室がある。これが中央図書館からあまり沢山の本を借りることができない要因になるかもしれない。中央図書館の場合は学部生も院生も「学習用図書」5冊までしか借りることができない。「研究用図書」については、学部生は5冊まで借りられるが、大学院生は20冊まで借りられる。では、この「学習用図書」と「研究用図書」とは何かについて疑問を持っている人も多いだろう。「学習用図書」と「研究用図書」が分けられる理由とは何だろうか。これは所蔵している場所の違いほかにならない。私が必要とする研究図書は「学習用図書」のところに分類されていることもあ

る。時々、全く同じ本であるはずなのに、それぞれのラベルが付いている場合もある。そのときに、「研究用図書」を見つけて借りに行く。大学院生は「研究用図書」を長く借りられるからだ。長く借りられることはいいこととは限らない。いったん本を家まで持って帰ったら、「今からすぐ読まなくてもいい」と思いながら、返却日が迫っている場合がある。そのため、貸し出し期間が長ければ長いほどいいというわけではない。

研究用の図書はよく「学習用図書」にカテゴリ化されている。長く借りられないため、必要な部分のコピーを取るかまたは、その場で読むことが多い。

留学生活だからといって、生の日本文化を体験できる機会が多いとはいえない。幸い本を通じて自分の世界を少しずつ広げようとしている。このような機会を提供している図書館に感謝している。

(デイン・チェ 環境学研究科博士前期課程2年)

➤➤➤➤➤➤➤➤➤➤ お知らせ ➤➤➤➤➤➤➤➤➤➤

☆ 早朝開館（試行）が始まりました！

「館長と話そう！ 2007」で要望のあった授業前に図書館を利用したいというご意見にお応えし、平成21年4月から、早朝開館の試行を開始しました。平日の開館時間を45分早め、8時からの開館としました。図書の貸出・返却はもちろん、当日分の施設利用も受け付けています。ぜひご利用ください。

☆ 資料収納用ロッカーの設置について

新館4階通路に資料用ロッカーを20台設置しました。利用できるのは院生の方で、利用期間は1回につき1週間、最長4週間です。多くの資料（もちろん貸出を受けたもの）を常時図書館で利用したい場合に利用できます。受付カウンターでお申し込みください。

##### 【行事等】 < 21. 1. 6 ~ 21. 4. 5 > #####

- ・研究開発室オープンレクチャー「聖なる数学：算額」講師：深川英俊 参加者50名〈1/19〉
- ・研究開発室オープンレクチャー「想いをかたちにー書誌ユーティリティと共に歩んでー」講師：雨森弘行 参加者70名〈3/2〉
- ・研究開発室オープンレクチャー「ラーニングコモンズの本質」講師：米澤 誠 参加者60名〈3/16〉
- ・友の会トークサロン ふみやむゆふべ「そろばん今昔」講師：藤本保紀 参加者31名〈3/10〉
- ・東海地区大学図書館協議会平成20年度第2回研修会（西尾市岩瀬文庫）〈3/4〉

- ・『ラーニング・コモンズ』フォーラム（文学研究科講義室）参加者72名〈3/18〉
- ・資料収納用ロッカー利用要項（H21.3.31 館長裁定）
- ・プロジェクト利用要項（H21.3.31 館長裁定）
- ・セミナールーム利用要項（H21.3.31 館長裁定）

編集委員会

増田晃一（委員長）小林恵子（中）松脇まゆみ（中）佐藤香織（中）大井千恵子（経済）大塩和彦（情言）伊藤由美（理地球）鈴木美奈子（医分館）